

・雨でも休まず、268回、269回・

「小原本陣の森・若柳嵐山の森」

- ・定例活動 : 9月 6日 (第一日曜日) : 小原本陣の森・団地化を目指す、弁当持参
*ベテラン向き、担い手育成、技術向上、参加費400円、
- ・定例活動 : 9月20日 (第三日曜日) : 若柳嵐山の森・里山交流、多様な森林活動
*一般むき、参加費400円、主食・自分の汁椀、飲料水。
-
- *注意1 : スズメ蜂の活発な時期。黒っぽい衣類厳禁、長袖着用。熱中症注意・水を取る事
- * 2 : 初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合、ベテランは各自森へ
・服 装 : 汚れても良い服装、着替え・滑らない靴。
・持 参 : 成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水
- * 3 : 危険管理・救急体制 : 森林ボランティア保険他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

非営利 NPO の意義

オーストリア出身の米国の経済学者 Dr. Dorucker は、1969年の著書「断絶の時代」の中で、「経済自由競争原理の20世紀は、人間の持つ”貪欲”が無限に拡大して経済破綻を招く事となるだろうと予言した。(1990年初頭のバブル経済、2008年のメリルリンチの破綻等の経済危機が現実になった)。これに対して、「21世紀は、人間の善意に価値を置く、利潤分配を目的としないNPO：非営利活動が過熱する経済自由競争の抑止力となり、社会の中核を担うこととなるだろう」と予告している。

著作権の関係から
ウェブページでは
図を省略しました

緑のダム（非営利活動）は、行政の手の届きにくい「私有林の荒廃再生・保全」を行っており、企業としても取り組みが難しい（日本の森林での）経済性創出に挑戦している。このような活動を通じて当会は、企業の社会的責任（CSR：Corporate Social Responsibility）の代弁者にもなり得る存在として登場しかかっている。

社会機構が複雑になるに従って、私たちのような非営利活動が、行政や営利企業の手の届かない部分を埋め合わせる活動はますます重要になって、しかも大きな影響力を持つようになって行くのだろう。だが、非営利活動の自由度を悪用する団体も続出して、NPOの健全な発展を阻害している。主な阻害要因は、政治や宗教、暴力団などの隠れ蓑になっている。また、21世紀の初頭現在、NPO活動は社会に必要とされていながら未だ、「趣味でやっている」という見方をされており、経営手法が未熟なために「NPO会計基準」さえ定まっていない。ために当会は、そのの所を何とか解決したいと日夜、実践しつつ模索している。

小原本陣の森・定例活動（8月2日：第1日曜日）

Forest Nova☆ 麻布大学2年 廣石由美

8月2日(日)はいつものように小原の定例活動を予定していましたが、この日は残念ながら土砂降りでお原の活動は中止となりました。活動日が雨で中止になったのは私が Forest Nova☆で活動を始めてから1年半ほどで初めてのことで、それほど定例活動が中止になるような雨が降っていないということに驚きました。

そのため今回は、市立桂北公民館で勉強会を行いました。この日は『生命の森宣言』の方々も来ていらして、様々な意見を頂きました。これについてはまた次回の記事でご紹介したいと思います。

今回の勉強会では主に小原で実際どのような活動をしていて今後どうしていくのかを詳しくお聞きしました。

小原本陣の森では現在林地団地化を目指して整備をしています。小原の森は色々な山主さんが所々土地を所有しているため、山主さんをついにまとめ集約化して施業をしていった方が一つの目的をもってよりよい整備ができるということです。また、集約施業をしないと理想的な環境調査も機械化もできず効率的な施業が難しくなるといいます。およそ3700haの土地をまとめると施業しやすいそうです。

団地化をしみんなで協力してより良い森づくりをすすめるために、町内会に参加したり小原の活性化に協力したりと、まちづくりの視点からも活動をしています。

現在小原は中里山を始め整備を進めており、その他の場所も許可を申請したりと幅を広げています。今後の施業についても林業の方々に協力をしてもらいながら進めていく予定とのことです。また、林業の方々の勉強会にも参加し、山で作業する上でのGPSの方法などもお聞きし活用できないか検討中のようです。

以上、小原についてのこれまでやこれからの活動について沢山お話を聞くことができ、小原で今後活動する上で色々と勉強になりました。地域の方々と一緒に森づくりができるのはとても素敵なことだし、良い森づくりをする上でとても大切なことだと感じました。私たちがそういった関わりや繋がりを持って活動したり、このことを大切にしていけたらなと思います。

若柳嵐山の森・定例活動（8月16日：第3日曜日）

報告：伊藤小夜子

（コミュニケーションの・・・輪・輪・・・みんなの参加で森は良くなる）

真夏の真ん中で花が少ないと思っていたら、森の入口の花畑では、オレンジ色のコスモス、カンゾウ・白・紫の桔梗、そして百日紅（サルスベリ）、向日葵と賑やか！

お盆休み中と言うこの活動日は、ゆかりのある遠方の友人の参加者多し。本日の参加46名。

Novaは、藤野町の林業自営の高橋林業さんの初指導を受ける。また、三重からの帰省中の滝沢元リーダーとの再会を喜んだ。



林相を説明する

・“望星の森”は高校生たちは、「夏休み中」で宮村先生と高校時代の山岳部の友人・辻さんとOBの渡辺君と3人で”望星の森”の下草刈り。蜂に刺された宮村先生と渡辺君、「高校生でなくて良かった！」？薬を塗っている間、山岳部時代の冒険、名誉の負傷？の傷痕見せてもらった。蜂にもメグズ、午後も仕上げでスッキリ。蜂と言えば、黒川さんの日本蜜蜂の蜜が、昼食後に出され、その多さに皆ビックリ。また、蜜に付いている蛾のさなぎは、高級釣り餌だとか。

・体験学校では、相模原サポートセンターの佐藤指導員と中学生の佐藤玲衣さん、築地魚市場・永年活躍した片又さんは「森と海の関わりを深めたい」と。

・森林整備班の経路作りでは水源橋への経路を復活させ、いずれは”コマアジサイ道路”を目論んでいるとか（角田談）

・お花畑班では、NPO みんなの森の畠山さん、石岡姉妹などの応援で楽しい、雑草抜きコミュニケーションが出来て、花床もスッキリと。昼食後、地主さん”鈴木ブルーベリー農園”の摘み取りの楽しさ。「好きなだけご試食下さい」とのご厚意に甘えてあの樹、この樹と有難く・美味しくご試食させて頂きました。参加のみんなも同様。お持ち帰りは、はちきれんばかりの、中カップ300円、大カップ500円

・川田森林隊長の戸山高校時代の友人、岡田さんと井伊さんは、「NPOの友人の活動を見学に」と参加。こうして遠方の人の輪が広がるのが嬉しい！

・B地点での作業

Forest Nova☆ 麻布大学2年 神宮理沙

8月16日(日)の嵐山定例活動日に、初めて高橋さんとお話をしました。今までForest Nova☆は緑のダムの佐々木さんに現場での作業の指導を行ってもらっていましたが、10月からは高橋林業の社長である高橋さんに指導をお願いすることになりました。

この日Forest Nova☆はB地点での植生調査を1日かけて行いましたが、作業の様子を午前中高橋さんに見てもらいました。B地点での植生調査は去年から行っているので今年で2回目になります。冬に行った間伐の効果を見ることが、現在のB地点の植生を知ることが目的に植生調査を行っていますが、そのほかにも、間伐の時期を特定する



ためにも調査したデータを使うことができると高橋さんからアドバイスをいただきました。B地点では以前に緑のダムで1度間伐を行っていますが、高橋さんのお話ではもう木が混みすぎているとのことでした。毎木調査では陰樹が多いこと、下草調査では下草が少なくなっていることなどが結果として現れてくるので、B地点では間伐の時期に来ていることがわかると教えていただきました。

B地点は学生が施業計画の立て方や作業を覚えるために緑のダムからお借りしています。調査の結果を反映させた施業を行うために高橋さんにご指導していただき、B地点の材を使って「間伐材の利用」をたくさんの人に発信できるよう、私たちにできる活動を今後も行っていきたいと思います。

緑のダム・湘南の森定例活動報告（7月25日：第四土曜日）

報告 岩澤由美子

（くもり・小雨・晴れ、参加7名、）

始めて、平塚在住の坂さん、インストラクター神奈川会副会長・瀬尾さんが参加され、丸茂出版・丸茂さん（北相模会員）が取材にいらっしやいました。丸茂さんは「ランドスケープ、マイガーデン」を出版されているそうです。

朝、湘南平の当会の拠点”ともしびショップ”で皆でコーヒーを飲みながら取材タイムを過ごしている内に振り向くと雨が！！。草刈りに行っていたら濡れ鼠になるどころでした。

ちゃんとタイミングよく雨も上がり、霧のロマンチックな山道を進み現場へ……、まずは朝礼を終え活動範囲を見渡して見回りました。数日続いた雨は草の成長を増し、ベンチに蔦が覆い隠す勢いの勢力！

一番東側の前回、梅苗を2本抜かれていた現場に到着すると……やはり枯れていました。

この戻り雨が一週間早ければ良かった、自分が水やりに来ればよかった。梅に申し訳ない！！

お昼まで、ここ等を草刈りしている間に佐藤さんは、浅間神社裏北側斜面に丸茂さんを案内し、昼食は皆で神社横のウッドデッキで和やかに。

さすが、ランドスケープの丸茂さんから素晴らしい提案がありました。テーブルから南側を見るとチラチラ海岸が見えるのですが、視野の一角を樹木が額縁がわりの海が見えるように景観間伐をしたら素敵ですよ～”と！！。新しい目標ができましたね。ゆくゆく、大磯側とコンタクトをとります。

午後は、皆さんは草刈りで私と丸茂さんと瀬尾さんを景観の良いポイントや展望台に案内しました。つくづくこの湘南の森は、海の見渡せる、パノラマ・海風の森なんだなあ～とあらためて感動しました。

*小原宿活性化推進協議会：小布施視察（7月26日：第四日曜日）

朝8時、JR 駅前出発～中央高速～上信越を經由して人口12,000人、観光客120万人の小布施町に着いた。町域に入ると道路沿いに花々が咲き乱れ、塀は全て生垣で庭は、よく整理されている。バスを降りて歩く小道も同様。どうして、町全体が、花々に囲まれた花園なんだろう。原因は、元々は何の特徴もない平凡な盆地だったのだが、町長を長期務めた唐澤さんの40年間の努力の積み重ねの結果という。

町が花一杯で、桃栗・りんご…、関連する産業の広がり・六次産業作り（3次産業×2倍のアイデア産業）とか言って、いろんな仕掛け作りをしている。

ここと比較すると、相模湖町は隠れた宝の山。森あり、湖あり、古民家あり、古文書あり、歴史の旧家あり、甲州古道あり、小原本陣あり、溪谷美あり、……無数あり。資金は、相模原市が後押



している。相模湖はかつては年間、350 万人が森を湖の観光地として訪れたが、目下の繁栄に満足して、次なる手を打たなかった。今では、隣接の高尾山が三ツ星の観光人気地となって年間、350 万人以上の観光客を迎えているのに、ここ相模湖の観光入れ込み数は 50 万人を切っている。そこで往年の評判・人気を取り戻すために小原宿活性化推進会議が立ち上がって地域起こしに万進している。ここを森林活動の拠点にしている当会としても、人ごととして傍観しておれないのだ。

林業先進地視察・尾鷲：吉田林業本家、速水林業、(8月8日・9日)

共催：毎日新聞社、協力：(社)国土緑化推進機構
報告：石村黄仁

一通りの整備の見通しを付けた今の”若柳嵐山の森”を今一步、先に進ませるイメージづくりとして、予てから、森の仲間たちに我が国では FSC 認証一号にして、世界一級水準にある三重県の「速水林業」の森を見せたかった。

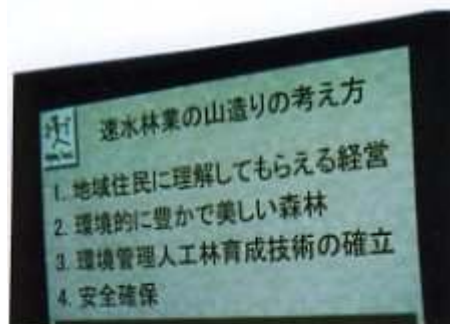
この夢が毎日新聞社と国土緑化推進機構のご支援で実現できた。緑のダム会見から希望者を募って参加者は、北都留森林組合の中田参事、小林住宅工業の目黒部長、鈴木設計士、小原活性化推進会議から中嶋会長、永井広樹副会長、学生連合の神宮学生、斎藤学生など合計 14 名であった。神奈川県や相模原市からの参加も計画したが、諸般の事情で実現できなかったのは残念に思う。

初日の視察地、吉田本家では、森林に分け入っての GPS (global positioning system:位置確定システム) の操作実務、夕食も早々に済ませて、座学を 9 時過ぎまで取り組んだ。1 日のスケジュール終了後も、本家吉田正木さんを囲んで質問攻めで、特に学生は熱心に 12 時過ぎまで吉田さんの話をメモしていた。

吉田正木さんは、迷惑顔一つせず、丁寧に應對してくれた。心から感謝する。

2 日目、速水林業では、当主の速水亨さんが諸手を挙げて待っていて下さった。到着の挨拶もそこそこに座学に入り 11 時から、観察路を案内してくれた。ドイツの森林学者が言う「美しい森林は豊穡」を信ずる速水さんは、見事、それを実践している。ここは現在、世界に 972 カ所ある FSC 認証りのトップ水準の森林で、高木(杉・ヒノキ)、中層木(落葉広葉樹)、低草木(シダなど)で開きしに勝る見事な美林である。

12 代、約 350 年かけて、”美しい森は豊穡”という考えを伝統として継承してきた速水林業の森は、何に例えようか。この森には、年間 3~4 千人の訪問者があるという。私は 3 回目の訪問で、2 回目



の訪問時の「その数の訪問者の対応では、事業に差し支えませんか？」と親父さんの勉さんにお尋ねしたが、親父さんは「FSCの森林精神をお伝えする事が、私どもの使命になっていますから」と言う回答であった。速水林業の取組は筋金入りだと感じた。この日の視察は、アツと言う間の充実した訪問であった。

① お盆前の土日とあって往路・復路共に東名・伊勢の高速道路は連続的に渋滞であったが、往路は参加者自己紹介共に森に掛ける想いや希望、復路は吉田本家、速水林業から待た見聞の紹介や意見交換で退屈するどころか、大いに議論が盛り上がりましてむしろ時間が足りないと思うほどの充実した時間が持てた。また、森林地域活性化を定款3に掲げる当会にとって今回の参加者に地域の代表である小原宿活性化会議の会長・副会長が参加した意味が大きい。

② 「木を使う事は、森を守る事」ということと言うけれど、植えれば太陽エネルギーを得て無限であるはずの木々が、年々減少していく現実をどう考え対処して行くか、この現実をもっと厳しく考えて行かねばならない」。斎藤学生のこの発言には学生たちは、もっと厳しく先を見据えているという印象を受けた。学生連合の彼らは、我々より遥かに切実に環境の悪化を身近に感じているのだ。

③ また、都市民がもっと森林を身近に感ずるようになることが必要だ。ネットワーク化して活動の輪をひろげるべきだと言ったのは神宮学生であった。

④ 京都・吉田町森林組合が集約施業を成功させたが、施業の広域化と機械化・コストダウンを図らねば世界の林業に互しては行けない。我が国では林が小規模・零細で機械化・コストダウンは広域化を図る大胆な林業政策が必要である。現状の林業行政は、小手先の技術論に偏していると思う。

⑤ 森林規模が零細という事が、我が国の素材生産の現場の零細という結果になっており、大規模生産を可能としている外材に押される最大の原因となっている。

⑥ 我が国の森林技術は、世界最先端を行っているが、これが零細素材生産者での先端技術であって、大規模・低コストの合理化・生産性向上に生かされていない所に問題がある。

⑦ 京都・日吉町森林組合は優秀だが、所謂、ドングリの背比べの中で優秀という事であって、世界に伍して行く力とは言えない。例えば、田辺市の山長商店は1社で5千haの森林を持ち植え付けから育林・伐出・製材・建築まで一環経営を出来るから、品質の高い木材が適正価格で出荷出来ている。

⑧ 万を単位とする広域集約化という施業方法をもっと徹底しないことには、大量・安価な外材に対抗できない。高速道路パーキングエリアで、仕上げ材を満載した数台の大型トレーラーを見かけた。何れも、スプルース、米松などの外材であった。

⑨ ドイツでは、我が国の半分の森林面積であるが、建材の生産量は2倍だそうだ。また、林業現場の指導者の殆どが博士号を持つフォレスターであるという。一次産業としての林業の現場・素材生産の場では日本は、いかにも遅れている。後進国とさえ感じた視察行であった。欧米、特にドイツ林業を少し学び実践・検証してみようと思う。

*三浦～川崎～多摩～相模原をつなぐグリーンベルト構想 (8月1日：第一土曜日)

この構想は、川崎市が発進元で「三浦市～川崎市～多摩市・・・町田市・八王子市・相模原市」など三浦・湘南の海から多摩川を遡って丹沢・相模原とつなぐ、グリーンベルト構想である。同日、10時から15時30分まで、「川崎・国際流通センター」で開催された。

当会からは、A0版2枚の活動パネル掲示と2千個の「緑のダム・FSC積木」を出品した。

2部構成のシンポジウムは、涌井教授（桐陰横浜大）



コーディネーターに、阿倍・川崎市長ら6市の市長・副市長が出席した1部では、この構想に対する各市の現状と対策で、約300人が参加した。対話式2部のシンポジウムは、会尊重加者との対帯、質疑応答構成であった。

シンポ1部で印象に残った発言は、阿倍・川崎市長の「森林部から都市部、海浜部に繋がってこそ、環境保全は意味がある」と言う話と相模原市（安部副市長）の発言で「相模原市は、旧津久井四町との合併で、森林地域が一举に2万haが参入し、市域が一举に3.6倍になった。合併地域は、神奈川県の水源地であるため水源の森の保全・再生が課題となり下流各市に水を供給しなければならない。大変な重荷である。各市のご協力を願いたい。相模原市では、森林部で活動しているNPOの”緑のダム北相模”と、都市部で活動している”こもれびの森”が頑張ってくれている」という評価もあった。何れの市も様々な課題を抱えており、広域連携して取り組まねば環境問題は、解決していかない。

相模原市：市民協働事業

小原本陣の森：林地団地化・集約施業のころみ（8月15）

相模原市の市民協働推進課と契約して、小原本陣の森の”団地化・集約施業の試み”に挑戦している。この試みは、細切れになっている林地を一定規模の広さで生産性の上がる作業の出来るようにしよう、という新しい施業方法である。契約期間の4か月の経過をチェックするために、相模原市の4名が「小原本陣の森」を見にきた。活動内容は適正の評価をして下山した。

4人参加者で最後まで同行出来たのは、一人だけで「森林活動は、ハードだな」の印象を持っただろう。



岐阜森林文化アカデミー訪問：8月23日

森林の担い手後継者育成に定評のある岐阜県美濃市にある同アカデミーに当会の会見であった学生連合フォレストノバ二藤学生が、大学卒業後、入校した。

こんな事からオープンカレッジ当日23日、訪問した。篠田学長の基調講演は、森林に対して敬虔で謙虚な格調の高い講演であった。特に、無限の太陽エネルギーでCO2を固定化する森林を化石燃料に継ぐエネルギーとして本格的に取り組まねばならないと強調した。

二藤学生を担当する原島幹典教授は、森づくりフォーラムで見かけた森林政策を専門にする方であった。他の先生方は、30代・40代の「先ず、現場が大切」と主張する若手で構成しており、学内は潑刺とした雰囲気でもまれていた。

校舎は、基礎以外はすべて木製で、さすが、林業先進地の岐阜県だなどの印象を受けた。このような取組みには大いに学ばねばならない。



神奈川植樹祭便りに掲載された事務局長石村の紹介記事は
カラー版をウェブページでご覧いただけます。

<http://midorinodam.jp/kitasagami/pdf/kanarin0906.pdf>

をご覧ください。

先月号の記事の訂正とお詫び

- 1.FSC 材として写真掲載のクリ材時計は埼玉県飯能市名栗材でした。
- 2.木工班の宮大工を目指したいとする加藤学生を応援しているのは、兼松会員ではなく鎌倉在住の某大学教授でした。訂正して、お詫びします。

.....
活動のモットー : 急がず、楽しく、無理せず、休まず、ボチボチと.....
そして、沢山の参加で森は良くなる。

名 称 : NPO 法人緑のダム北相模
事 務 局 : 154-0023 東京都世田谷区若林3-35-9
発行人 : NPO 緑のダム北相模・運営委員会 : 03-3411-1636
H P : <http://midorinodam.jp>
E-mail : info@midorinodam.jp
協働団体 : 神奈川県(政策部土地水資源対策課、環境農政部森林課、県央地域県政総合センター) セブンイレブンみどりの基金、相模原市(市民協働推進課)
毎日新聞社(水と緑地球環境本部) JFEメカニカル
ご支援の団体 : WWF・japan, イオン財団、市民社会チャレンジ基金、神奈川県建具協同組合、生命の森宣言・東京、東海大付属・望星高校